

# イタリアにおける革命的サンディカリズムの 形成とゼネラルストライキ(1903年～1906年)

横山 隆 作

## I. ま え が き

本稿は、『淑徳大学研究紀要』第16号(1982年3月)所載の拙稿「20世紀初頭のイタリア労働運動と社会党改良派(1901～1902年)」に引続いて、1903年から1906年の時期のイタリア労働運動を研究対象とする。イタリア労働運動史上、この時期は、1904年9月の全国ゼネラルストライキ、革命的サンディカリズム(il sindacalismo rivoluzionario)の形成、そしてイタリア社会党内諸潮流の激しい論争・対立を特徴としている。そこで本稿は、ゼネラルストライキが激発する社会情勢の中で、形成期の革命的サンディカリストが何を考えていたのかという問題を考察してゆきたい。

なお、このような主題ならば当然、イタリア労働運動と関係する国際労働運動——フランスの革命的サンディカリズム、第2インターナショナル、1905年のロシア3月革命など——についても論及せねばならないのであるが、今度は紙幅の制約もあり、全くこれらについてふれていない。読者諸兄の御宥恕を乞う次第である。

## II. 『社会主義前衛』の創刊

20世紀の初頭、ザナルデッリ内閣の登場以後、労働組合や社会党に対して解散命令が出るといった弾圧政策は行われなくなった。しかし労働争議やデモの際に官憲・軍隊が発砲して死傷者が出る事件は頻々とおこった。表1は1901年から1906年前半までの期間の、官憲・軍隊の対労働者・農民発砲事件における民衆側の死傷者数を示したものであるが、この表に載っているものだけでも——この他に未確認・詳細不明の事件がある——79名の労働者・農民が死亡している。

表1. 官憲軍隊の発砲事件による労働者農民の死者・負傷者数

年	月 日	地 名	州 ・ 県	死者	負傷者
1901	4～5月中	ローディ・ガルガニコ, イスキテッラ	プーリア, フォッジア県	—	5
1901	5月	ブレンノ	ロムバルディーア, プレッ シア県	2	4
1901	5月	ソムマティーノ	シチリア, カルタニッセッ タ県	—	20
1901	5月	ペスココタンツァ	アブルッツィ, ラクィラ県	1	11
1901	6月27日	ベッラ	エミリア・ロマーニャ, フ ェッラーラ県	4	43
1901	8月5日	カッサーノ・ムルジェ	プーリア, バーリ県	1	4
1902	8月14日	パラゴニア	シチリア, カターニア県	—	4
1902	9月8日	カンデラ	プーリア, フォッジア県	5	10
1902	10月13日	ジャッラターナ	シチリア, ラグーサ県	2	50
1903	2月23日	ペタッチャート	アブルッツィ・モリーゼ, カムポバッソ県	3	30
1903	3月14日	プティニャーノ	プーリア, バーリ県	—	8
1903	4月20日	ガラティーナ	プーリア, レッチェ県	2	20
1903	5月21日	ピエーヴェ・ア・カマイオ ーレ	トスカナ, ルッカ県	3	1
1903	8月31日	トルレ・アンヌンツィアータ	カムパーニャ, ナポリ県	7	40
1904	5月17日	チェリニョーラ	プーリア, フォッジア県	3	14
1904	9月4日	ブッルジェルー	サルデーニャ, カリアリ県	3	20
1904	9月14日	カステッルッツォ	シチリア, トラーパニ県	2	10
1904	9月15日	セストリ・ポネンテ	リグーリア, ジェノヴァ県	—	15
1904	9月16日	ジェノヴァ	リグーリア, ジェノヴァ県	3	50
1904	9月17日	トリーノ	ピエモンテ, トリーノ県	1	5
1904	9月19日	フランカヴィツラ・フォン ティ	プーリア, プリンディジ県	1	4
1905	4月18日	フォッジア	プーリア, フォッジア県	3	12
1905	5月15日	サンテルピディオ・ア・マ ーレ	マルケ, アスコリ・ピチェ ーノ県	1	1

年	月 日	地 名	州 ・ 県	死者	負傷者
1905	8月15日	グラムミケーレ	シチリア, カターニア県	14	68
1905	6月以降	サンタ・マリア・イン・ラ ミス	プーリア, フォッジア県	5	8
1905	全	トッレ・サン・ススピツィオ		1	14
1905	全	ヌオーロ	プーリア	2	4
1905	全	チェリニョーラ	プーリア, フォッジア県	5	不明
1905	12月8日	タウリサーノ	プーリア, レッチェ県	2	不明
1906	3月23日	スコッラーノ, ムーロ	プーリア, レッチェ県	1	3以上
1906	5月7日	トリノー	ピエモンテ, トリノー県	1	7
1906	不明	カリメーレ	プーリア, レッチェ県	1	
1906	5月12日	カリアリ	サルデーニャ	2	22
1906	5月下旬	ゴンネーザ, ヴィッラサル ト, ボノルヴァ, ネビーダ	サルデーニャ, カリアリ県	6	

この表は、Giorgio Candeloro, Storia dell'Italia moderna VII, Feltrinelli, Milano, 1978, p. 142 に他の資料を補って作成した。

1902年9月6日から9日にイモラで開催されたイタリア社会党第7回大会では、トゥーラーティ (Filippo Turati, 当時45歳) やビッソラーティ (Leonida Bissolati-Begamaschi, 当時45歳) らを中心とする改良派が党内多数派となった。改良派は、ザナルデッリ内閣と協調しつつ、労働立法や税制改革の推進、そして社会党系労働協同組合が参加できる公共事業の拡大といった方針をとっていたので、例えば1901年6月のベッラ・フェッラレーゼ事件の際のように、労働者・農民射殺事件は内閣の責任ではなく、偶発事件にすぎないという態度をとっていた。しかしこのような改良派に対する社会党内の反発も強く、ことにナポリのアルトゥーロ・ラブリオーラ (Arturo Labriola, 1873年生～1959年没, 当時29歳) などは、社会党ナポリ支部機関紙『プロパガンダ』(La Propaganda, 1899年5月1日創刊) の紙上で、激しい改良派批判を続けた。

1902年12月、ラブリオーラと『プロパガンダ』紙編集者のエンリコ・レオーネ (Enrico Leone, 1875年生～1940年没, 当時27歳) はナポリからミラノへ引越して、すでにミラノ社会主義連盟(社会党ミラノ支部)内で、トゥーラーティと対抗していたヴァルテル・モッキ (Walter Mocchi, 1870年生～1955年没, 当時32歳) と合流した。1902年12月25日、ラブリオーラ達は週刊新聞『社会主義前衛』(Avanguardia socialista) をミラノで創刊した。これはそれまでの社会党内革命派=反改良派の中からラブリオーラらのグループが革命的サンディカリスト

として分離し、独自の活動を行う第一歩であった。そこでしばらくの間、このグループを前衛派と呼んでおくことにする。<sup>1)</sup>

これ以前に、反改良派の下院議員エンリコ・フェッリ (Enrico Ferri, 1856年生～1929年没) が、1902年2月25日にローマで『社会主義』(Il socialismo) を創刊し、トリノーにいるオッディーノ・モルガリ (Oddino Morgari, 1863年生～1944年没) らと共に統合派 (または完全主義派 integralista, または中央派) を形成していた。さらに旧労働者主義派のラッザーリ (Costantino Lazzari, 1857年生～1927年没) がやはりミラノで1902年7月5日に週刊紙『プロレタリアの行動』(L'Azione proletaria) を創刊し、非妥協派 (intransigentista) を形成していた。

『社会主義前衛』の創刊後、ミラノにおけるラブリオーラ達の勢力は急に拡大した。またこれと並んで、1903年2月から3月にかけてイタリア各地の社会党支部から、改良派の方針に反対し、労働者農民射殺事件について政府の責任を追求する声明・決議が出され、結局、改良派もこれを認めて、1903年3月24日、社会党国会議員団はザナルデッリ内閣に反対する決議を行った。

1903年2月28日、ローマの印刷工が8時間労働制と24%の賃上げを要求してストライキに入った。この争議を指導したイタリア書籍労働者連合のローマ支部長パルパニョーリ (G. Parpagnoli) は、当時社会党執行委員であり、非妥協派であった。ローマの印刷工は、雇主側が労働組合の要求を拒否してスト破りを導入すると、3月21日の総投票——ストライキに入った1,712名による——によってストライキの続行を決議した。さらに4月5～6日の最終交渉が決裂すると、4月7日に印刷工はローマ市の労働者のゼネラルストライキを要請する宣言を発した。4月8日の朝、ローマ市はゼネラルストライキとなり、市電も止り、街には復活祭でローマに来た旅行者や外国人の姿しか見られなくなった。しかし翌4月9日は聖木曜日 (復活祭前週の木曜日) にあたり、商店は店開きした。ローマにいた社会党のフェッリやその他の幹部が協議した結果、4月9日の深夜にローマのカーメラ・デル・ラヴォーロと書籍労働者連合からゼネスト中止指令が出された。この後、印刷工の争議は敗北した。<sup>2)</sup>

1903年4月1日、改良派のリーダーの一人であるピッソーラーティが『アヴァンティ!』の編集長を辞任すると発表した。これは『アヴァンティ!』が同年1月の下院クレモナー区補選で、社会党のソルディ (Romeo Soldi) を推さず、改良派と親しい急進党のサッキ (Ettore Sacchi) を支持する論文を掲載したことを統合派や前衛派に非難されたためであった。社会党内ではしばらく、同紙の財政難についての議論が続いたが、1903年5月11日、フェッリが後任の「アヴァンティ!」編集長となった。フェッリは同紙上で、海軍大臣ベットロ (Giovanni Bettolo) とテルニ社の癒着・不正を追求するキャンペーンをはって、対内閣強硬姿勢を示した。

ミラノではこの頃、改良派が少数派になり、1903年7月末にトゥラーティら改良派はミラノ社会主義連盟を脱退してミラノ社会主義者グループという別の社会党支部を結成した。

1903年9月、フィレンツェで社会党の青年組織である全国社会主義青年連合(Federazione nazionale dei giovani socialisti)が結成され、しばらく後に機関紙『社会主義青年』(Gioventù socialista)が創刊された。この組織からは間もなく、オラーノ(Paolo Orano)、ビアンキ(Michele Bianchi, 1883年生~1930年没、後のファシスト閣僚)、マゾッティ(Tullio Masotti)、デ・アムブリス(Alceste De Ambris)などの前衛派=革命的サンディカリストの幹部が輩出した。<sup>3)</sup>

国会では、内務大臣ジョリッティ(Giovanni Giolitti)が、海軍省とテルニ社の関係についての議会調査の動議を下院で否決した後、1903年6月、単独で内相を辞任した。1903年10月21日、おりからロシア皇帝ニコライII世の訪伊に反対する運動が高まる中、重病のザナルデッリ首相は国王に辞表を提出した。(ザナルデッリは同年12月26日に死亡した。)後任首相にジョリッティが指命された。ジョリッティは、まず議会極左派との提携をはかり、トゥラーティと、急進党親ジョリッティ派のマルコーラ(Giuseppe Marcora)に対し、秘かに入閣を要請した。

トゥラーティは、ジョリッティ宛10月23日の手紙で、大衆に理解されないだろうから社会党員の政権参加は時期尚早だと述べ、他方でビッソラーティではどうかと伝えた。ビッソラーティも入閣は断った。<sup>4)</sup>

急進党のマルコーラも、党内左派のサッキとの対抗上、入閣は拒絶した。

ジョリッティ首相は、1903年10月29日の電報で国王ヴィットリオ・エマヌエーレIII世にトゥラーティの入閣辞退を報告し、ただちに180度方針転換して、立憲君主制右派の一部を懐柔し、また前ナポリ県知事で、ローマの富裕な一族の出身としてヴァティカンとのつながりをもつティットーニ(Tommaso Tittoni)を外相に起用し、11月3日に第2次ジョリッティ内閣を発足させた。<sup>5)</sup>

## 注

- (1) Alceo Riosa, *Il sindacalismo rivoluzionario in Italia*, De Donato, Bari, 1976, p. 27 および第1章.
- (2) Giuliano Procacci, *La lotta di classe in Italia agli inizi del secolo XX*, Riuniti, Roma, 1970, pp. 226~272.
- (3) Riosa, *Il sindacalismo*. . . , op. cit., p. 251.
- (4) Giorgio Candeloro, *Storia dell'Italia moderna VII*, Feltrinelli, Milano, 1974, pp. 153~155.
- (5) Raffaele Colapietra (a cura di), *Giovanni Giolitti*, D'Anna, Messina, 1973, p. 70.

なお、1904年5月27~30日に開かれた第1回党大会によって、従来の急進派は公式に急進党(Partito radicale italiano)になっていた。

### III. ブレッシェ会議と反保護主義同盟

1904年2月14～15日、ブレッシェにおいて、社会党支部のロムバルディア州大会が開催された。この地方大会には、改良派からはトゥラーティ、ビッソラーティ、トレヴェス (Claudio Treves, 1869年生～1933年没)、ボノーミ (Ivanoe Bonomi, 1873年生～1921年没) などが、反改良派からはラプリオーラ、モッキ、ソルディ、ラッザーリなどが出席して、それぞれの主張を展開した。そしてモッキの決議案が賛成73, 反対68, 棄権2で採択され、前衛派・非妥協派連合が多数派となった。このモッキが提出した決議は要約以下のごとくであった。(1～4は決議の節である。<sup>6)</sup>)

1. ブルジョア国家に対するプロレタリアの行動の永続的・非妥協的に革命的な性格を断言することによって、大会は、プロレタリア階級の政治組織が、日和見主義や立憲君主制下の現実主義が優勢な議会政党へと変身することは、社会主義精神の墮落であると宣言する。  
ゆえに、階級闘争の原則および公権力をプロレタリアが獲得するという本質とは両立しないブルジョアジーとの同盟は、君主制あるいは共和制政府への参加によるにせよ、その方針の支持によるにせよ、拒否する。
2. さらに、ブルジョア体制下のどのような改良活動も、それがプロレタリアの圧力によってひきおこされたものであり、また労働者にとって部分的に有益であるとしても、常に不完全であり、資本主義的生産の基本的メカニズムに決して切り込むものではないということを考えることによって；大会は、改良の実行は、プロレタリアートの側からのいかなる協力も妥協もありえず、ブルジョア政府にまかされるべきであると断言する。
3. 反君主制の強調。
4. 最後に、党の議会活動は、扇動活動と公共の事からの運営にプロレタリアートが権能をもつことにおいて頂点に達するとはいえ、党は、議会においては私的所有の廃止はもとより、イタリア (王国) 憲法の外に出るようなどんな政治的・経済的獲得も行われないと判断するがゆえに；「大会は国家と政府に対する攻撃と防衛の手段を何一つ放棄することなく、そしてまたそれが必要となる場合のために暴力の行使をも留保するものであると断言する。」<sup>7)</sup>

以上のようなブレッシェ会議の決議は、今日から見るとおそろしく乱暴なことを言っているが、当時の前衛派の考え方を率直に示していると思われる。

1904年3月27日、ミラノにおいて反保護主義同盟 (Lega antiprotezionistica) が結成されたが、この団体は当時問題となっていたイタリア・オーストリア通商協定における相互関税率引下げとイタリア産ブドウ酒の対奥輸出制限の問題に関して急遽結成されたものであった。そしてここには自由主義経済学者・政治家のエイナウディ (Luigi Einaudi), ジレットティ

(Eduardo Giretti), デヴィーティ・デ・マルコ (Antonio De Viti de Marco) と、ラブリオーラ, ソルディ, レオーネなどの南部出身の社会党員が参加した。<sup>8)</sup>

この団体の基本的主張を、1908年以降急進党国会議員となったデヴィーティ・デ・マルコの発言によって見ることにする。1887年保護関税によって代表される保護貿易主義体制は、南部の農産物輸出を抑えつけることによって、南部農民に農産物価格の国民的にみて不適当な低水準までの低下を強制しており、他方、外国工業製品の輸入制限によって、南部農民に高価格の工業製品を購買させている。このことは、保護貿易体制が政府と結びついた一部の産業を保護し、そこに資本と労働を厚く配分するが、南部のみならずイタリア全体の輸出産業と商業の発展を阻害しているという意味で、国民的な産業保護にはなっていないことを意味する。さらにイタリア国内における低価格の南部農産物と高価格の北部工業製品との南部にとって不利な不等価交換をもたらし、そしてこれは消費者の利益とは言えない。

したがって保護主義に反対するのであるが、しかし反保護主義同盟の主張はこれだけでなく、税制改革——ことに消費税の撤廃——、そして常に北部に手厚く行われる諸施策、鉄道建設、土木灌漑等の公共事業、公教育、社会保障などについても、「法の平等」というスローガンによって南北の平等を主張するのである。<sup>9)</sup>

ラブリオーラなど南部出身の社会主義者が反保護主義=経済自由主義を主張したというのは、南部の労働者農民にとって深刻な重税制度が、政府と結託した一部の特権的な工業の保護と一体構造をなしており、そしてこの構造=保護主義体制は南部プロレタリアートを最大の被害者としているが、そればかりでなく北部の労働者農民の利益にも反していると考えたからであろう。そしてこのような主張に対して、北部に地盤をもつ社会党改良派は概して冷淡であった。それは例えば、アジア産の絹によって大打撃を受けた絹工業をはじめとする繊維産業や、独・英・米などに比較して著しく低い生産力水準の金属機械工業などの労働組合とその代表である社会党議員が、国内市場の確保のために保護関税政策を擁護していたという事情によるものであった。

## 注

- (6) Riosa, *Il sindacalismo*. . . , op. cit., pp. 102~105.
- (7) Gian Biagio Furiozzi, *Il sindacalismo rivoluzionario italiano*, Mursia, Milano, 1977, pp. 19, 81~82.
- (8) Giuseppe Aragno, *Socialismo e sindacalismo rivoluzionario a Napoli in età giolittiana*, Bulzoni, Roma, 1980, p. 24.
- (9) Massimo Finio (a cura di), *Il pensiero economico italiano 1850-1950*, Cappelli, Bologna, 1980 中の Ernesto Rossi 論文, pp. 404~414. および Francesco Barbagallo, *Stato, Parlamento e lotte politico-sociali nel mezzogiorno (1900-1914)*, Guida, Napoli, 1980, pp. 115~119. および Franco De Felice (a cura di), *L'età giolittiana*, Loescher, Torino, 1980, pp. 132~136 の De Viti de Marco が1903年4月19日にナポリで行った講演。

## IV. 社会党第8回（ポローニャ）大会

1904年4月8日から11日に、イタリア社会党第8回大会がエミリア・ロマーニャ州ポローニャで開催された。大会時点での党員数と代議員数は第2表のごとくである。1902年9月の第7回大会と比較して、北部のパダーナ諸県の党員が約10%増加しているが全国では約1%党員数が減少した。<sup>10)</sup>

表2. 社会党第8回大会時の党員数

地 方	党 員 数 (%)	代 議 員 数
北 部 パダーナ諸県	18,101 (52.4)	493
その他	7,358 (21.3)	164
中 部	6,522 (18.9)	165
南部・島部	2,538 ( 7.4)	99
合 計	34,519 ( 100)	921

パダーナ諸県とは、〈エミリア・ロマーニャ州〉ポローニャ、フェッラーラ、フォルリ、モーデナ、パルマ、ピアチェンツァ、レッジョ・エミーリア、ラヴェンナ、〈ロムバルディーア州〉プレッシア、クレモーナ、マントヴァ、バヴィーア、〈ヴェネト州〉ロヴィーゴ、ヴェローナ、パードヴァの計15県。なお代議員数は支部数とほぼ同数。

Procacci, op. cit., p. 360.

大会は、いくつかの報告、提案、討議の後、ラブリオーラ提出の決議案とビッソラーティ提出の決議案をめぐって沸騰した。

アルトゥーロ・ラブリオーラの提出した決議案は、前のプレッシャ会議の決議をもとに、フランスのポール・ラファルグの意見を聴き、さらにフェッリを介してドイツのカール・カウツキーの修正を受けたものであった。ことにポローニャ大会のための決議案の最後の文言は、カウツキーの、無政府主義と誤解されないようにという意見によって、「大会は政府に対する攻撃と防衛の手段を……」のように、プレッシャ決議中の「国家」の一語を削除していた。このようにしてラブリオーラ案の調子はかなり和らげられていたとはいえ、社会党の現政権への参加・支持を否定し、手段としての「暴力の行使」の可能性を残すという前衛派の考えが貫かれていた。<sup>11)</sup>

これに対するビッソラーティ案は、決定的な時期には、緊急に必要な改良をプロレタリアートの側に獲得することが確かならば、党は政府の方針に支持を与えることができるという内容のもので、1901～1902年に社会党がザナルデッリ内閣を支持した路線を継続しようとするものであった。<sup>12)</sup>

党内の論客が次々と立って激論を交す中で、4月10日午後、トゥラーティはラブリオーラに反駁して次のような内容を含む発言をした。

この集りには2つの魂があるが、党は一つだけの意志、一つだけの魂のものである。これは見解によって分裂した諸党の会議であって、社会党大会ではない。



イモラの大会（第7回大会）では政府の方針を支持する可能性に対する偏見はなかった。

ラブリオーラの決議案は現在の情勢においては過去のものであり、うしろを向くものであり、後戻りするものである。そして我々は前進を望んでいる。

トゥラーティは、「叛乱の気分」を煽る新傾向（つまり前衛派のこと）として現われているものは本質的に無政府主義であるとして反対し、さらに「暴力」について厳しく反論した。そして「改良とは革命の道である」と言い、例えば8時間労働制によって獲得した余暇の2時間をプロレタリアートが文化と知性のために費すならば、この2時間は革命をもたらすと語った。

ストライキについては、我々は破滅するストライキは避けるべきだと考えるが、一方にはストライキは良い手段であり、常に力づける必要があると考える者がいると批判した。

政権への参加問題については、「権力の全体的獲得以前に、部分的獲得の必要がある」けれども、本当の政権問題というのは将来のプロレタリア独裁の時の問題だという考え方を語った。（以上は筆者の読みこみによる要約である。<sup>13)</sup>

ラブリオーラ、ピッソラーティとは別の議題で、リゴラ(Rinaldo Rigola, 1868年生～1954年没)が報告＝決議案を提出していた。これは社会党の反君主制的性格を強調し、社会党の政権参加を許容せず、議会における政府支持を否定した内容の、統合派の路線に近いもので、モルガリなど13名の署名によるものであった。ところがフェッリは10日の討論終了直前、リゴラ案の対案を突然提出した。これは次のようなものであった。

「大会は、階級闘争の方法は政府の方針への支持も政権への社会党員の参加も許すものではないと考えるがゆえに、

社会党の全活動については、社会主義的意識の教育、搾取と寄生の体制の批判と解体および経済的政治的行政的改良のプロレタリア的獲得を目指す多様な形態の日常活動が必要であるということ、多数者の決議に対する少数者の尊重とともに、明言するものであり、全社会党員の連帯行動における党の統一を明言する。<sup>14)</sup>」

要するにこのフェッリの決議案は、改良派に反対し、かつ少数派である前衛派または改良派を牽制しつつ、党の統一を主張するものであった。

最終日の11日午前、決議案は各代議員が自らが代表する党員数分を投票するという間接的な総投票によって採決された。最初は、ピッソラーティ案賛成12,255人(315票)、ラブリオーラ案賛成7,410人(198票)で、ピッソラーティ案が採決された。次は、統合派、前衛派、非妥協派支持のフェッリ案賛成16,304人(424票)、改良派と一部の統合派が支持したリゴラ案賛成14,844人(377票)で、フェッリ案が採決された。

新たな社会党執行委員は、グワリーノ(Eugenio Guarino, 前衛派)、クローチェ(Giuseppe Croce), ロメーオ・ソルディ、マランゴニ(Guido Marangoni, 前衛派)、E. C. ロンゴ

バルディ (Ernesto Cesare Longobardi, 前衛派), レルダ (Giovanni Lerda), ファービ (Fabi), エンリコ・フェッリ (『アヴァンティ!』担当) で、ここには改良派は含まれていない。結局、フェッリらの統合派の勝利であった。<sup>15)</sup>

ボローニャ大会の後、前衛派の勢力は著しく伸張した。1904年5月にはミラノのカーメラ・デル・ラヴォーロ執行部を前衛派・非妥協派連合が握った。ローマでも7月10日のカーメラ・デル・ラヴォーロ執行委員選挙で、前衛派に近いサバティーニ (Romolo Sabatini) をはじめとする6名の社会党員と3名の急進党員が選出された。ヴェネツィアでは前衛派の党執行委員マランゴーニがカーメラ・デル・ラヴォーロ書記長を勤めていた。マントヴァではドゥゴーニ (Enrico Dugoni) が農業労働組合運動を指導して、改良派の有名な指導者ヴェッツァーニ (Carlo Vezzani) と対立していた。モデナ県ミランドラではディナーレ (Ottavio Dinale) が、フェッラーラ県コッパロではモニチェッリ (Tommaso Monicelli) がそれぞれ強力な農業労働組合運動のリーダーとなっており、ナポリではグッリーノ、ロンゴバルディ、トデスキーニ (Mario Todeschini) が活躍していた。<sup>16)</sup>

#### 注

- (10) Procacci, *La lotta . . .*, op.cit., pp. 240, 360.
- (11) Riosa, *Il sindacalismo . . .*, op.cit., pp. 115~117.
- (12) Procacci, op.cit., p. 349.
- (13) Franco Livorsi (a cura di), *Filippo Turati: Socialismo e riformismo nella storia d'Italia* Feltrinelli, Milano, 1979, pp. 149~165.
- (14) Procacci, op.cit., p. 358.
- (15) Riosa, op.cit., pp. 126~128.
- (16) *Ibidem*, pp. 131~140.

### V. 1904年の全国ゼネラルストライキ

この時期に頻発した官憲軍隊の発砲による労働者死傷事件について、大衆の怒りが高まっていた。すでに1903年8月31日のトッレ・アンヌンツィアータで死者7名を出した事件の直後、抵抗中央書記局の改良派指導者で下院議員のカブリーニ (Angiolo Cabrini) すら、新たなプロレタリアートの流血事件が発生した時には抗議ストライキを行うべきであると主張していた。1904年5月17日にはチェリニョーラの農民デモに死者3名が出た。

1904年8月末、サルデーニャ島カリアリ県のブッジェルー鉱山において、炭坑労働者がストライキを行った。これはフランス系鉱山会社の始業終業時間変更に対抗し、あわせて賃金支払いの遅延をなくすこと、労働組合の職業紹介活動の承認、年金制度などを要求するものであった。ストライキは平穏であり、9月4日にもサルデーニャ鉱山労働者連盟の議長ジュゼッペ・カヴァレーラと他の労働組合代表1名が、会社の社長達と鉱山事務所で交渉を続け

ていた。そこへカリアリから県副知事と歩兵第42連隊130名が、ストライキの調査と交渉促進のために到着し、副知事は労働組合代表と会談に入った。事務所の外で兵士達は、宿舎にするために倉庫を開けるように労働者に命じたが、労働者達は軍隊がストライキ鎮圧に来たと誤解して投石を始め、軍隊が発砲して、労働者3名が死亡し、兵士7名が負傷した。翌日さらに軍隊とカラビニエーリが増援され、ストライキは敗北・終結した。<sup>17)</sup>

このブッジェルーの労働者射殺事件は全国に大きな衝撃を与えた。モンツァのカーメラ・デル・ラヴォーロは改良派指導者も一緒になって、新たな虐殺が生じれば自動的にゼネラルストライキをおこすと決議した。抗議は各地で続々とおこり、前衛派は暴力には暴力をもって対抗せよとよびかけ始めた。9月1日、ミラノではドゥゴーニを先頭にカーメラ・デル・ラヴォーロの労働者集会が、「決議と精神的 (platoniche) な示威にはいかなる有効性もない」ということを確信し、さらに、殺人犯の政府が命ずる権力の残虐で暴力的な力に対して、プロレタリアートはその生き生きとした革命的なエネルギーをもって反対しなければならない」という文言を含む8日間の全国ゼネストの決議を行って、社会党と抵抗中央書記局に送った。しかし社会党執行委員会と抵抗書記局が結論を出せずにいるうちに、9月14日、またも虐殺事件が発生した。

9月14日の夜、シチリアのカステルツォとサン・ジュリアーノの農民の抵抗同盟の集会が開かれている時、カラビニエーリの一隊が協同組合の建物の中にある抵抗同盟本部に侵入して、会員名簿の引渡しを命じた。これを拒否した抵抗同盟の幹部をカラビニエーリが逮捕しようとする、同盟の農民達がこれを阻止しようとし、カラビニエーリが発砲して農民2名が死亡した。

翌15日、カステルツォの事件を聞いたセストリ・ポネンテ (ジェノヴァ近郊) の労働者2,000人が抗議集会を開いた。中には激しく扇動する者がいて、主催者は集会を解散させようとしたが大衆はきかず、その後市内各地で労働者と官憲の衝突がおこり、官憲の発砲によって多数の負傷者が出た。

同じく15日、モンツァでは、カステルツォのニュースを聞くとただちに5,000人の労働者が自発的にストライキに入り、半日遅れてカーメラ・デル・ラヴォーロがゼネストを宣言した。

9月15日の夜、ミラノでは、カーメラ・デル・ラヴォーロの前に多数の労働者が集ったため、改良派の抵抗書記局長カブリーニや前衛派のカーメラ指導者達は会議を行い、翌朝アレナ (円型競技場) で労働者集会を開いて方針を決定すると労働者達に伝えた。この時の会議では、後の改良派側の文書によれば、カブリーニが3日間のゼネストを提案して、会議で——前衛派もまじえて——決定したというが、定かではない。<sup>18)</sup>

1904年9月16日金曜日、イタリア史上空前の全国ゼネラルストライキが半ば自然発生的に

始まった。<sup>19)</sup>

9月16日の朝、ミラノでは市電もガスも止り、新聞も発行されなかった。アリーナには1万人の労働者が集まり、指導者達の演説があり、ミラノのカーメラ・デル・ラヴォーロのストライキ宣言が発表されたが、ストライキの期間・終結日時などは判然としなかった。この日の午後、アリーナに集まった15,000人の前で、トゥラーティは、大衆に平静を呼びかけ、議会極左派の全議員集会を提示し、一方ラプリーオーラは「血に染った政府は倒れねばならない……ただ労働者諸君がこの内閣の総辞職の保証を得た時にのみ、その時にのみ諸君の抗議は停止されるであろう」と演説した。さらにラッザーリも内閣総辞職までゼネストを続行することを主張したが、結局、明確な方針の出ないまま集会は終わった。大衆はドゥオモ広場などでデモを行ったが、官憲軍隊の出動はなかったので、市中は平穏であり、事件はピヤホルのけんかで1名が死亡したものであった。

9月17日土曜日、ミラノではゼネストが維持され、9月15日に誕生した皇太子（後のウムベルト二世）慶祝の国旗はすべて投捨てられた。官憲軍隊の出動はなく、カーメラ・デル・ラヴォーロの腕章をつけた労働者の警備隊が市中における馬車の通行を一切禁止したので、ミラノ軍司令官さえも徒歩で司令部へ出勤せねばならなかった。ミラノのアリーナには3万人が集った。前衛派がイニシアティブをとるストライキ情報紙が発行された。アリーナの午前中の集会では、鉄道員のストライキ参加が必要なこと、9月18日と21日に極左派下院議員集会が開かれること等が報告され、またトゥラーティが、内閣総辞職までゼネストを続行するという前衛派の方針に反対し、2～3日後には我々に飢餓が迫ってくると発言した。午後の集会では、鉄道員労働組合「解放」(Riscatto)の書記長ブランコーニ(Emanuele Branconi)が今夜0時より鉄道員もゼネストに入ると発表した。一方ミラノ県知事の電報を受けた政府は、全国主要駅・信号所に官憲を派遣して鉄道運行機能を確保させた。結局、鉄道ストはロムバルディーア州とピエモンテ州その他北部の一部で実施されたにとどまった。また郵便・電報局員もゼネストに参加しなかった。

次に9月16日以降の、ミラノ以外の主な都市の状況を見てみる。

ヴェネツィアでは16日から18日までの3日間、鉄道、蒸気船、ゴンドラなどの交通機関も、電気、ガスも止まり、商店は閉じられ、郵便・電報局員、清掃局員もストに加わり、教会さえも門を閉じた。しかし市中は平穏であり、事件は喫茶店でのストをめぐる市民の乱闘一件だけであった。

ジェノヴァでは16日から19日まで照明は消え、食料品店さえ閉じられた。港湾労働者を先頭にした労働者達は16日から17日の夜まで、街頭で官憲軍隊と衝突をくりかえし、バリケードが作られ、電線が切断され、市長公邸と警察署に投石が行われた。ジェノヴァ近郊のサムピエルグレーナやセストリポネンテでは鉄道妨害が行われ、列車は停止し、信号所などが焼

打ちされ、街道では電柱が切りたおされ、多数のバリケードによって道路も不通となり、ジェノヴァ軍司令官さえセストリポネンテに足止めされた。18日夕方にはジェノヴァに戒厳令が布告された。この地方では、ジェノヴァで1名、他で2名の労働者の死者が出た。

トリノーでは16日からゼネストが始まり、市電も止った。17日には道路にバリケードが作られ、官憲と労働者との衝突がおこり、ガレリ (Giovanni Garelli) という労働者が射殺された。

ローマでも16日にゼネストとなり、2万人のデモがコロンナ広場をうずめた。

この他にも大小の都市・コムーネで無数の労働者・農民・市民がストライキに参加した。その数はあまりにも多すぎて、一々都市名をあげることはできない。ただ、北部イタリアのほうが、より多くの人々・市町村がストライキに入った。ストライキの発生を資料で確認できない州は、アブルッツォ・モリーゼ、バジリカータ、サルデーニャ——カリアリでは労働者の抗議集会が開かれた——の3州だけである。

9月18日日曜日、ミラノでは極左派議員集会が開かれたが、結論は21日にローマで開かれる議員集会に持越された。ミラノのアレーナの集会では前衛派の指導者達が、少なくとも21日までゼネストを続行しようと扇動していた。ところが、大衆が何ら決定を聞いていないにもかかわらず、午後1時50分のミラノ県知事から内相へあてた電報では、本日をもってストライキは終結し、明朝から労働者は仕事につくであろうと報告されていた。そしてこの日の午後、ミラノから抵抗書記局の名前で、ジェノヴァ、トリノーなどのカーメラ・デル・ラヴォーロヘストライキ終結を指示する電報が打たれていた。皇太子慶賀のため、トリノーの南のラッコニージ宮へ行っていたジョリッティ首相も、ローマへ帰る特別列車を命じた。さらに18日の夜遅く、ローマなど殆んどカーメラ・デル・ラヴォーロに抵抗書記局からのストライキ終結指示電報が届き、こうして9月19日には北部主要都市のゼネラルストライキは終わった。

ミラノのゼネストは20日に終わった。一方、ピエツラでは19日にストライキが始った。マントヴァ県では前衛派のドゥゴーニの指令で19日から21日に農村部でゼネストとなった。

南部では、ナポリで19、20日とゼネストが行われ、バリケードが作られ、衝突がおこり、負傷者が出た。南部諸都市のストライキは19、20日に行われたものが多く、シチリアではさらに遅れて、21日にカルタニッセッタやカストロジョヴァンニの硫黄鉱山労働者がストを行い、カタニアでは22日にゼネストが行われた。

9月21日、ローマで開かれた極左派3党の国会議員集会では、トゥラーティや急進党の一部がジョリッティ内閣打倒に反対であり、フェッリの抗議のために極左派議員辞職という提案は否決された。結局この集会は政府非難の声明を出して終わった。

## 注

- (17) 山崎功『アントニオ・グラムシ』岩波書店、昭和41年、123～124頁。ジュゼッペ・フィオーリ、藤沢道郎訳『グラムシの生涯』平凡社、昭和47年、48～52頁。
- (18) Sergio Zaninelli, *Storia del movimento sindacale italiano, II. Le lotte nelle fabbriche 1861-1921*, Celuc, Milano, 1973, pp. 180～181. これは後述の1905年1月6～9日の労働組合の大会の文書。
- (19) 1904年9月の全国ゼネラルストライキの事件経過については、主として次の4著作によった。Procacci, *La lotta...*, op.cit., pp. 382～416. Riosa, *Il sindacalismo...*, op.cit., pp. 146～155. Lenzo Del Carria, *Proletari senza rivoluzione 1, Oriente*, Milano, 1966, pp. 376～386. Maurizio Punzo, *Socialisti e radicali a Milano 1899-1904*, Sansoni, Firenze, 1979, pp. 317～329.

## VI. ゼネラルストライキの総括と総選挙

ジョリッティ首相は、後日の『回想録』の中で、当時じきにゼネラルストライキは短期的なものはかないものだと分ったので、過剰な心配はしなかったし、軍隊や軍艦の用意はしたが、国家は真に必要な時にその力を示すべきだというのが私の理念だから、1898年暴動の際のペルー首相のような反動的手段——流血の弾圧——はとらなかつたという意味のことを書いて<sup>20)</sup>いる。

ゼネスト終結後、議会極左派や立憲君主制派の反動派（＝反ジョリッティ派）の政府攻撃に対して、ジョリッティ首相は10月18日の勅令による下院解散をもってこたえた。総選挙は1904年11月6、13日に行われ、ジョリッティの選挙スローガンは「反動でもなく革命でもない」であった。外相ティットーニの秘密交渉が成功して、ピオ10世とローマ教皇庁は、かつて1870年に教皇領ローマを奪取したイタリア王国の国政選挙にはカトリック信者の参加を認めないという1871、74年のピオ9世の回勅「ノン・エクスぺデット」を、この選挙について一時停止にした。そして社会主義打倒のため、政府支持のカトリック候補者が登場し、彼等は当選すると「議員となったカトリック」とヴァティカンから呼ばれた。

総選挙は、有権者総数2,541,317人（これは20歳以上人口の約14%にすぎない）、第1回総投票数1,593,886票、投票率62.7%（前回1900年の投票率58.3%）で、各党派の議席数は、立憲君主制ジョリッティ与党339議席、立憲君主制反対派76議席、急進党37議席、社会党29議席、共和党24議席、カトリック3議席（ただし実質的なカトリック議員はもう少し多い）であった。1900年総選挙に比較すると、極左派3党は、急進党4議席増、社会党4議席減、共和党5議席減であるが、社会党の得票数は全イタリアで98%増、ことに南部では3倍の増加となっていた。前衛派からは唯一名、ドウゴーニガマントヴァの決選投票で当選したが、ラブリオーラその他は落選した。著しく凋落したのは立憲君主制右派の反ジョリッティ派であ

り、ジョリッティの政治的勝利であった。<sup>21)</sup>

社会党の改良派と前衛派はゼネラルストライキについて全く対称的な評価・総括を行った。まず改良派の総括から見てみる。

『クリティカ・ソチャーレ』1904年9月16日・10月19日合併号におけるカッソーラ (Garzia Cassoa) 論文は、このストライキは彼ら (前衛派等) の勝利であり、我々 (改良派) の事からではなく、我々はもの笑いにされたと書いている。<sup>22)</sup>

『クリティカ・ソチャーレ』の同じ号の「責任の時」と題する論文によって、トゥラーティは次のように述べた。

「イタリアのほとんどで5日間の頂上を保ち、内乱から遠くない未来を予告する《大演習》と多くの人に思われた政治的ゼネラルストライキは、民主主義の大義とプロレタリアートにもたらされたかなりの利益と損害の中で——まだ確定的な決算書は出ていないが——、小生は、その推進者・活動家の予見やストの内在的目標とは全く別の、議論の余地無い意義を主張したい。」表明、抗議、警告を目的とする政治的ゼネストは否定されるべきでなく、5月1日メーデーがすぐれた世界的な例であって、最も文明的・平和的なものであり、決して暴力ではない。また政治的ゼネストは短期間のものであり、公共サービス (照明、パン、水、医療衛生、郵便電報、新聞など) を停止させてはならない。そしてトゥラーティは、前衛派の発言や行動を厳しく批判し、前衛派は自分達の個人的な馬鹿騒ぎを、なんと「プロレタリア独裁」と呼んでいると悲憤し、また「責任の時刻はすべての者にむかって打たれている」と述べた。<sup>23)</sup>

1905年1月6～9日にジェノヴァで開かれた第5回カメラ・デル・ラヴォーロ大会および第3回抵抗書記局会議共同大会の報告書中の「事実の教訓」という文章は、ひどく遠まわしな表現だが、前年9月のゼネストにおける前衛派の行動を、改良派の観点から5点あげて批判している。1. いくらかの指導者達は、ゼネストというものは何でも止めるものだと思い込んでいて、街灯やパンや衛生のような大衆に不可欠なものまで止めるという、ストライキの拡大についての大変な混乱に支配されている。2. いくらかの労働者組織は、抗議の形態や期間を量れない組織外の大衆の意志に従おうとした。3. 指導機関の活動の敏速性と、中央の委員会の観測による全国的な協調が必要だ。4. プロレタリアの力と暴力とをはきちがえるものがある。5. ゼネストという最高に有効で革命的な武器の行使には大いなる慎重さが必要であり、毎月ゼネストを叫んでいたのでは、じきにブルジョアの侮りを受けることになる。<sup>24)</sup>

一方、前衛派にとってこの巨大なゼネラルストライキは「目覚ましい成功」以外の何物でもなかった。そしてこのゼネストの体験に裏づけられた理論として、革命的サンディカリズム——以前から主張されてはいた——を一層鮮明に主張するようになった。例えば『社会

主義前衛』1904年9月30日号の一論稿(著者不詳)は次のように述べている。「労働者の組合(カーメラ・デル・ラヴォーロ、抵抗同盟、プロレタリアの生産・消費協同組合など)は、階級意識や労働者の団結の感情や工商農業管理能力の発展の機関であるばかりでなく、プロレタリアートの最終的解放と未来の社会主義社会の核のためのプロレタリアート組織の主要かつ特殊な中心でもある。<sup>25)</sup>」

またレオーネがフランスの『社会主義運動』(Le Mouvement Socialiste) 1904年11・12月号に掲載した論文は次のように言っている。「国家を支配階級からもぎとり、それをプロレタリアートに託すためには、投票用紙は不十分な手段である。プロレタリアートのなかに、社会化された経済活動を運営するのに必要な技術的能力をつくりだすことが重要である。……新しい生産制度は法律という一打撃で即興的につくられるものでもないし、自然発生的に生み出されるものでもないし、ましてや社会正義というばくせんとした希望を基礎にして組織されるものでもない。今や、この経済的能力の訓練にもっとも適した機関は、プロレタリアートの経済的機関、労働組合に他ならない。<sup>26)</sup>」

ゼネストについて同じくレオーネは、「プロレタリアの政治」(『社会変革』1905年1月16日号)と題する、とてもプロレタリア向きとは思えない文学的で難解な文章で、次のようなことを述べている。

《9月の日々》はイタリアのプロレタリアに階級闘争の政治的洗礼をしるした。9月のイタリアのゼネラルストライキは、他人の工場でうめき、自分のものではない畑で背をかがめている名も無き我らが勤労人民の苦しみ……貧困の底の暗闇に灯をともした。ゼネストは、想像力豊かな講演のきらめくどぶ川や、やかましい選挙の勝利全部よりもずっと良く、イタリア労働者の体に活力と信頼を注ぎこんだ。

ゼネストより数カ月すぎて、我々はこの意義ある歴史的事実、すなわち、昨日までプロレタリアートは国の政治的生活にとって不在であったが、しかし今日ではブルジョア政体の抑圧と横暴をはねのけ、攻撃する歴史的任務を主張し、宣言しているということに注目している。

イタリアのプロレタリアートは、バリケード戦も反乱も宣言しない。なぜなら彼らは、サンディカリスト運動の政治的ジンテーゼの表現としての、ゼネラルストライキを認識しているからである。<sup>27)</sup>

このレオーネの論文が載った『社会変革』(Divenire sociale)は、レオーネとマンティカ(Paolo Mantica)が1905年1月1日にローマで創刊した隔週刊誌である。しばらく後に彼らは自らを「純粹のサンディカリズム」と称した。この雑誌はソレルの『暴力論』(Georges Sorel, Riflessione sulla violenza)を1905年から1906年にかけて連載した。しかしイタリアの革命的サンディカリズムは、ソレルやフランスのサンディカリズムのような極度の反議会



主義はとらなかった。

ところで筆者（横山）は、1904年9月のゼネラルストライキの体験を経て、イタリアの革命的サンディカリズムは基本的に形成されたと考える。そこで以後は、「前衛派」の語の代りに「革命的サンディカリスト」等の語をもって彼らと呼ぶことにしたい。

注

- (20) Adolfo Pepe (a cura di), Movimento operaio e lotte sindacali (1880-1922), Loescher, Torino, 1976, pp. 123~125.
- (21) 馬場康雄「ジョリッティ体制の危機」、『社会科学研究』第31巻2号4号（1979年7月、1980年1月）東京大学社会科学研究所、61~66頁。
- (22) Carlo Cartiglia (a cura di), Il partito socialista italiano 1892-1962, Loescher, Torino, 1978, pp. 98~99.
- (23) Livorsi, Filippo Turati . . . , op. cit., pp. 165~176.
- (24) Zaninelli, Storia . . . , op. cit., pp. 182~183.
- (25) Idomeno Barbadoro, Il sindacato in Italia, Teti, Milano, 1979, pp. 308~309.
- (26) 河野稔『イタリア自動車産業における労使関係の展開 I』第一書林、1985年、183~184頁。  
なおこのレオーネ論文はイタリアでは“Socialismo” 1904年10月10日号に掲載されたものの仏訳である。
- (27) Alceo Riosa (a cura di), I leaders del P.S.I., Minerva Italica, Bergamo, 1980, pp. 93~96.

## VII. フォルティス内閣とソンニーノ内閣

1904年11月30日に第22議会が開かれ、翌1905年2月21日、ジョリッティ内閣は鉄道国有化法案を提出した。

かつて1875年に国は北部イタリア鉄道をパリのロートシルトから買収して1877年に国有化し、その後1885年には南部、地中海、シチリア、サルデーニャの4鉄道会社と公私合営協定を結んでいた。この協定の基本線は、鉄道運行業務・経営は鉄道会社が行い、車両は国が負担し、協定有効期間は60年間だが、20年後、40年後に国の買収権が生ずるというものであった。<sup>28)</sup>

当時の2大鉄道労組は、1899年に結成され、1904年11月に組合員32,770人を擁した鉄道員労働組合「解放」と、ここから1903年3月に分離し、1904年11月に組合員22,550人を擁した鉄道員連合であった。この2つの組合は鉄道国有化問題について1904年11月8・9日、ローマで共同の大会を開き、政府が賃金労働時間等についての組合との合意を拒否した場合、鉄道員を臨時に軍隊に編入して運行する「鉄道の軍隊化」が新たに実施された場合、そして公務員のストライキ参加を禁止した刑法181条が鉄道員にも適用される場合には、ゼネストを行うという決議を行った。

ジョリッティ内閣の鉄道法案の第71,72条は、あらためて鉄道員のストライキ権を否認し、実行されたストライキの推進・組織者は6カ月以上1年以下の禁固、参加者は1年以下の禁固等と定めてあり、スト禁止の代りに労使紛争の強制調停が行われることになっていた。

2つの鉄道員労組は統一的な扇動委員会を作ったが、この委員会は1905年2月25日にゼネスト提案を否決(39票対8票)し、代りに妨害戦術(ostruzionismo)を賛成32票対反対13票で採用した。これは鉄道運行規則を厳格に守る戦術、すなわち順法闘争で、2月27日から始まった。

社会党内では、スト権否認については、これは鉄道員を奴隷化するものだという見解で一致していたが、国有化については、トゥラーティら改良派は党の最小限綱領に基づいて国有化を支持し、他方、ラブリオーラは、スト権保持と、サンディカリズム的経済自由主義によって、私営に重きをおく公私合営——ただし将来の労働者管理を展望する——を支持していた。<sup>29)</sup>

1905年3月4日、ジョリッティ首相は、議会内外の左右両翼から攻撃され、公式には健康上の理由で辞表を提出した。これについてサンディカリスト側は「ジョリッティの逃亡」と言った。

3月12日にジョリッティ派のフォルティス(Alessandro Fortis)が後任首相に国王から指命され、4月初めにかけて、「ジョリッティの副官」と言われたティットーニを含む組閣を行った。フォルティス首相は4月7日に、鉄道法案を修正し、1905年7月1日から国営とすることで再提出した。この法案は、前の71,72条を削除し、スト権にはふれず、17条において鉄道員を公務員と規定しただけであった。このためかえって、刑法181条の公務員のストライキ禁止条項、1902年7月7日法および同年8月4日勅令による公務員が正当な理由なく職務を放棄した場合には自発的に辞職したとみなして、ただちに解雇するという法令が鉄道員に適用されることになり、状況は一層悪くなった。

鉄道法案は4月17日に下院本会議の審議が始まり、早くも4月19日に下院を賛成289、反対45で通過し、4月21日に上院で可決成立した。<sup>30)</sup>

法案成立以前、社会党改良派は71,72条問題が無くなったから労働者の勝利であるとしており、2つの労働組合間にも亀裂が生じ、サンディカリストの指導者の中にも鉄道ゼネストは不可能と見る者が出ていた。しかし4月16日、鉄道員の扇動委員会と抵抗書記局中央委員会は、17日からの鉄道員の全国ストライキを指令した。しかしこの全国鉄道ストに参加した組員は半数弱であり、同情ストも抵抗書記局によって拒否されていたから、ストライキはほとんど丸1日も維持できなかった。ただ例外的に、18日、フォッジア駅において、鉄道員と支援の農業労働者2,000名が官憲軍隊と衝突して2名の死者を出し、続く市中の衝突でさらに3名の労働者が死亡した事件が発生した。

この鉄道ストの失敗後、社会党内ではフェッリら統合派とサンディカリストとの関係が悪化し、1905年6月にレオーネやビアンキなど数名のサンディカリストが『アヴァンティ！』編集部から脱退した。

1905年夏から秋にかけて、オーストリアやドイツの社会民主党の活動の影響により、イタリアでも社会党が普通選挙実施要求の大キャンペーンをはった。この普選キャンペーンは統合派を中心に、他の派も協力したので、この時期、社会党内はしばし休戦となった。<sup>31)</sup>

1905年8月16日、シチリアのグラムミケーレでは、カーメラ・デル・ラヴォーロ主催の農民集会が開かれていたが、官憲が解散を命じたため衝突がおり、農民側に死者14名、重軽傷者多数が生じた。<sup>32)</sup>しかし社会党各派は、この事件については抗議ゼネストを提起しなかった。

1905年の秋、フォルティス内閣は、9月8日のカラブリア大地震や鉄道国有化に伴う財政支出問題でゆすぶられ、さらにスペインとの通商協定に調印して猛烈な反対を受けた。この通商協定の中では特に、スペイン産ブドウ酒の輸入関税を100リットル当たりで以前の20リラから12リラへ下げる点が問題となった。協定は11月18日勅令で発効したが、12月8日にはプーリア州タウリサーノにおいて協定反対デモの農民にカラビニエーリが発砲して2名が死亡する事件が発生し、12月17日の下院における法律化投票で否決され(293票対135票)、フォルティス内閣は12月18日に総辞職した。1906年1月30日に再びフォルティスが第2次内閣を形成したが、これも2月1日の内閣信任投票で、信任188、不信任221、棄権1で倒れた。<sup>33)</sup>

代ってソンニーノ (Sidney Sonnino) が1906年3月8日に組閣した。ソンニーノは、19世紀末には立憲君主制の君主制に力点をおいた主張をもつ強硬な反社会主義論者であったが、20世紀に入る頃から大きく主張を改め、南部問題に関心を向け、急進党の一部と協力関係を作り、ジョリッティ、フォルティスと対抗する立憲君主制右派の民主主義的改良主義の路線をとっていた。ソンニーノは組閣にあたって急進党から、法相にサッキ (Ettore Sacchi)、農工商務相にパンタノ (Eduardo Pantano)、そして財務省と教育省の政務次官を起用した。さらに、急進党サッキ派と親しい社会党統合派のフェッリに閣外協力を要請した。

3月初め、社会党議員団は、ソンニーノ内閣は反動内閣——この場合はフォルティスなしジョリッティを指す——に反対だからという理由で、フェッリの決議を承認し、続いて1906年3月9日、社会党は新内閣に信任を投票した。前の社会党ボローニャ大会で反政府路線のリーダーとなったフェッリが、今度は、「正直な保守的」内閣支持にまわったのである。

1906年3月23日、プーリア州レッツェ県では、農業労働者、パスタ労働者、パン焼工などがストライキを行っていた。彼らはスト破りを阻止しようとして官憲と衝突し、スコッラーノでは1名死亡、1名負傷、ムーロでも3名が負傷する事件となった。<sup>34)</sup>一方、1906年3月末から4月初めにかけての抵抗書記局中央委員会選挙でサンディカリストが勝利していた。こ

の抵抗書記局は4月26日ごろ、スコッラーノの労働者虐殺に抗議し、この次新たな労働者虐殺事件が発生した時にはゼネストを行うという決議を提起して、全国のカーメラ・デル・ラヴォーロの総投票に付した。しかし65のカーメラの内、ゼネスト支持は15のみであり、抵抗書記局中央委員会は総辞職した。

1906年5月、トリノーで工場労働者のゼネラルストライキが発生した。前年12月のカルーゾ機械のストライキ以降、トリノーでは10時間労働制を要求する運動が高まっていた。1906年5月3日木曜日、バス社（綿紡績）の労働者900人（内600人が女性）が10時間労働制を要求してストに入り、続く4日には、綿工業のポーマ社、マッツォーニス社など大小の工場の労働者がストに入った。モルガリなど社会党の指導者達の悲観的予測を裏切って、5日、ストライキ参加者数は16,000人（内12,000人が女性）に達し、さらに7日にはサヴィリアーノ社やフィアット社などの金属工業、化学工業等の労働者も加わり、25,000人の工場労働者ゼネストとなった。7日の夕方、労働者とカラビニエーリの衝突によって労働者8名が負傷し、その内の1名（Giovanni Cravero）が死亡した。7日の夜、トリノーのカーメラ・デル・ラヴォーロはゼネストを宣言し、9日朝に終結を決定したが、ゼネストは4万人ないし5万人の労働者によって10日まで続行された。モルガリは言った。「これまで我々は、金、工業、銀行、国家、軍隊、教会の力しか知らなかったが、しかし今や正義の決算のために雄々しき剣を把る人民の力を知っている。<sup>35)</sup>」

ゼネストの結果、トリノーの大部分の工場で10時間労働制と時間外労働割増賃率30%が行われるようになった。このトリノーのゼネストは、1900年のジェノヴァのゼネスト以来の目覚ましい労働者側の勝利であった。またトリノーの呼びかけに呼応して、5月8日にボローニャ、9日にフォルリ、アンコーナ、パルマ、ミラノ、ローマ、リヴォルノ、ナポリの労働者がストに入り、10日にはラヴェンナ、フェッラーラでもストとなり、その他にピエツラ、イモラでもストがおこった。これらはサンディカリストや統合派の勢力の強い地方であり、改良派はゼネストに拒否反応をおこした。各地のストライキは5月11日中に終わった。

この事件について1906年5月10日、社会党議員団はカブリーニ、ピッソラーティを代表とし、「下院は人民の虐殺を予防する法案をただちに審議し、承認することを決議する」という緊急動議を提出した。この動議は199票対28票で否決された。社会党議員団はこれに抗議して、5月11日から16日にかけて、24名の議員が辞表を提出した。結局、6月3日にこれらの議員の選挙区で補欠選挙が行われ、リゴラなど3名が落選したが、他は再び下院に復帰した。この補選の前、5月17日にソンニエーノ内閣は総辞職して「百日内閣」を終えた。後任にはジョリッティが指命され、5月27日に第3次ジョリッティ「長期内閣」を組閣した。<sup>36)</sup>

## 注

- (28) Franco Gaeta, *Storia d'Italia*, vol. XXI, UTET, Torino, 1982, pp. 229~234.  
 (29) Riosa, *Il sindacalismo . . .*, op. cit., pp. 219~238.  
 (30) Francesco Brancato, *Storia del parlamento italiano*, vol. 10, Flaccovio, Palermo, 1976, pp. 451~452.  
 (31) Giuseppe Mammarella, *Riformisti e rivoluzionari nel PSI 1900-1912*, Marsilio, Venezia, 1968, pp. 191~195.  
 (32) AA. VV., *Attività parlamentare dei socialisti italiani*, vol. III, ESMOI, Roma, 1973, p. 98.  
 (33) *Ibidem*, pp. 107~109  
 (34) *Ibidem*, p. 124  
 (35) Paolo Spriano, *Storia di Torino operaia e socialista*, Einaudi, Torino, 1972 (1958), pp. 120~129.  
 (36) *Attività . . .*, op.cit., pp. 154~157.

## VIII. 労働総同盟の結成

1906年夏、ソレルのイタリア語版『暴力論』（“Lo sciopero generale e la violenza”）がローマで出版されたが、この序文でレオーネはソレルと異なる次のような見解を示した。

「ストライキ自体は暴力行為ではない。それは自己の労働を自由に処分するという正当な権利の行使である。むしろそれは階級社会で認められた権利として暴力の除去である。」「外観の類似に反して、サンディカリズムはブランキズムの正確な対立物である……。」「バリケードと蜂起の戦術はその古い歴史的価値を失った……。」サンディカリズムは蜂起戦術にも合法主義にも反対する。「ストライキという武器は、プロレタリアートとブルジョアジーの間の思想、感情、利害の対立を常に鋭く刺激している……。」「かくして社会主義は精神的に、とりわけ実践的に革命的であり、また暴力自体の創造的效果というジャコバンの予見から遠ざかりつつある。ストライキのたゆまぬ行使を通じて労働運動は、社会主義を、不毛な蜂起をくりかえすことなく、《永久革命 *rivoluzione permanente*》の状態に導くものである。<sup>37)</sup>」

以上のようなレオーネの見解に対して、ラブリオーラやその他のサンディカリストが反論し、ソレル自身も後に「暴力の弁護」（1908年5月）によって、レオーネを名指してはいないが、反論した。

1906年8月25日の『社会主義前衛』はサンディカリストの宣言を掲載した。宣言を起草したのはラブリオーラ、ファズーロ (Silvano Fasulo)、ロンゴバルディで、これは同年10月にローマで開催される予定の社会党第9回大会に向けて、サンディカリスト内の諸見解を統一するためのものであった。この宣言はおおよそ次のような内容をもっていた。

近い将来の社会革命の歴史的前提は、労働者階級の、他のすべてから独立した階級への形

成であり、このためには労働者階級は、その倫理的・社会的生活、熱望、利益を資本家階級のこれらから分離しなければならない。

我々はゼネラルストライキの観念を、資本家階級の収奪の終幕の同義語として、社会戦争のシンボルとして、そしてその時々の小さな政策の貧弱な方便としてではなく、我々の全般的活動のきわだった特徴としている。

イタリアには、さまざまな経済的形態——資本家的生産、手工業的生産、大小の土地所有等々——があり、これらが支離滅裂な政治状況をもたらしているので、社会党は諸階級、諸政党との活動の違いを厳格に保持しなければならない。

わが国の伝統的社會主義は、選挙しか考えず、妥協・協調の民主政党として動いてきたから、こういった口先の理論を事実をもって打ち壊すには、アンチテーゼを鋭くし、闘争精神を強め、合法性を尊重しこれに従属しているプロレタリア大衆を、<sup>38)</sup>力の合理的な行使にむけて鍛える必要がある。

さて1906年9月30日、労働総同盟が結成された。ここに至る経過は次のようなものであった。

1902年11月1、2日にミラノで中央抵抗書記局が作られたが、この組織の主要任務は、実質的には地域ごとに、職業別に組織されている個別の労働組合（抵抗同盟）が行う労働争議との関係で、カーメラ・デル・ラヴォーロと、職業別・産業別全国労働組合——これを「連合 federazione」とよぶ——との利害がしばしば衝突したため、これを調整することであった。カーメラと連合との、いわば抵抗同盟の上部団体間の紛争は、主に、個別組合の争議の指導権——団体交渉に加わる権利——の問題、個別組合からの納金をどちらがどれ程受取るかという財政的問題、そしてカーメラにはサンディカリストの影響力が強く、連合には社会党改良派の影響力が大きいということから生じるイデオロギー問題が原因となっていた。

1906年2月に金属労働組合（FIOM）がフランスのC.G.Tにならってイタリアでも労働者の統一組織を結成しようという呼びかけを行い、3月4日には改良派の労働組合指導者の会議で新組織の設立が決められ、全ての抵抗同盟から組合員100名ごとに代表を選出し、この代表によって1906年9月29日～10月1日にミラノで労働総同盟結成大会を開くことが8月6日に通知された。

1906年9月29日午後、全国の700組合、20万ないし25万人の組織労働者（これは全組織労働者数の約 $\frac{1}{3}$ 、全産業労働者数の約 $\frac{1}{20}$ ）<sup>39)</sup>を代表する500人が集って会議が始まった。

まず議長選挙で改良派が勝った。反対派（少数派）はサンディカリスト、共和党系労働組合代表、非政治的な協同組合運動家達であった。サンディカリストは独自の総同盟規約を準備してきていたが、ナポリ地方などかなりの数のサンディカリスト系組合が出席していなかった。

長時間の討論の末、9月30日の夕方、改良派のレイナ (Ettore Reina) の「……ただちに労働総同盟の結成を宣言する」という決議案とサンディカリストのグッリーノの対案が採決され、各代表が組合員数だけ投票する方式で、レイナ案114,533票、グッリーノ案53,250票となり、労働総同盟の結成が決った。サンディカリストは労働総同盟規約を全組合員の総投票にかけるという提案を再度行ったが、これが58,894票しか得票できずに否決されると、10月1日には大会を放棄、退場した。その後、改良派の提案する労働総同盟規約が採択されたが、その概略は以下の通りである。

第1条、イタリアにおいて、労働総同盟 (Confederazione Generale del Lavoro) は、生産と労働の資本主義制度に対する労働者階級の闘争を達成し整序するために結成された。

第2条、総同盟は労働組合全国連合〈職業別産業別労組のこと〉か地方のカーメラ・デル・ラヴォーロに加入している全組織によって結成された。〈連合やカーメラ非加入の組合でこの規約に従うものは、大会か総投票が承認すれば加盟できる。〉(〈〉内は筆者の要約・補足。)

第3条、総同盟の任務。a) プロレタリアートの運動の全般的指導……連合とカーメラの機能は、第一に全国的全般的利益、第二に労働者集団の地方的利益を尊重して制限されなければならない。b) 〈プロレタリアートの代表=国会・地方議会議員——共和党や急進党に配慮して社会党単独支持を表明しない——へプロレタリアートの会議の主張を伝達すること〉。c) 〈国家、自治体におけるプロレタリアートの代表の活動の強化や、立法についての労働者のすべてのイニシアティブを支援し整序し協調させる。〉 d) 〈協同組合や相互扶助協会との関係の緊密化。〉 e) 〈諸政党との合意をつくること。〉 f) 〈労働者団体間の紛争を解決すること。〉 g) 〈労働者階級の経済的・倫理的・知的改善のための宣伝。〉 h) 〈労働者階級の全国的・国際的団結の発展をめざすこと。〉 i) 〈組織、ストライキ、未組織労働者数の統計の編集。〉 j) 〈社会立法の綿密な監視と適用のため、労働庁に対する激励と管理。〉 m) 〈プロレタリア大衆に、権利要求綱領の全獲得に向って歩みはじめるように、力をつけること。〉

第4条、指導部。〈総同盟委員会7名、他に監察委員会30名。〉

第8条、財政収入。a) 全構成員の年間拠出金、農業プロレタリアート5チェンテージミ、工業プロレタリアート10チェンテージミ。b) 寄付。c) 支部組織からの特別援助。連合やカーメラ非加入の団体が承認されて総同盟支部となるものの年間拠出金、農業プロレタリアート25チェンテージミ、工業プロレタリアート50チェンテージミ。<sup>40)</sup>

こうして労働総同盟は結成され、翌1907年1月にはリナルド・リゴラが書記長に就いた。しかし労働組合運動の実質的活動を各地域ごとの職業別・産業別の抵抗同盟が行うことには変りはなく、労働総同盟の指導力はサンディカリスト系労働組合や、1906年6月12日に統一されたイタリア鉄道員労働組合 (Sindacato Ferrovieri Italiani) —— 総同盟非加盟 —— など

にはおよばなかった。

一方、1906年7月19日、トリノー工業家同盟が結成されていた。この団体は、トリノーのゼネストの後、労働運動に対抗するために結成された経営者団体であった。この規約第2条は、会員と工業の集团的利益の保護・防衛、労働の自由の尊重と防衛、労働者との善き合意を促進するという3つの目的を掲げていた。そして第10条から14条はストライキ対策を定めており、工業家同盟運営委員会の決定を加盟企業が遵守すること、そして、ストライキ期間およびその後15日間はストライキ参加労働者を他企業が雇用してはならないとしていた。このトリノー工業家同盟にはまもなく242企業が加盟し、会長に製糸業経営者クラポンヌ(Luigi B.Craponne)が就任し、これはその後、1908年のピエモンテ工業家同盟、1910年のイタリア工業総同盟へと発展していった。<sup>41)</sup>

## 注

(37) Furiozzi, *Il sindacalismo . . .*, op.cit., pp. 28~30, 86~87.

(38) *Ibidem*, pp. 82~85. この宣言の署名者は以下の通り。社会党指導部のロンゴバルディ、マランゴーニ、グワリーノ。『社会変革』のレオーネ、マンティカ。『社会主義前衛』のラブリオーラ、モッキ、ラッザーリ。『アヴァンティ!』のモニチェッリ、オラーノ。『プロバガンダ』のファズーロ、F. ヴァカロプロス、アメリゴ・グラツィアーノ。『火花』(フェッラーラ)のアデルノ・ニコライ。『人民』(ボローニャ)のパオロ・マッツォルディ。『人民の叫び』(トリノー)のL. ベルタ。『労働者』(ノヴァラ)のE. ジェンマ。ヴェネツィア・サンディカリストグループのチェーザレ・スペランゾン。『社会主義者の闘い』(ジェノヴァ)のピアンキ。『労働組合』のサバティーニ、P. デディヴィーティス。イエージ支部のE. マンチネッリ。(無所属)ステファノー・バルトロッタ、ロベルト・フォルジェス=ダヴァンザーティ、エンリコ・ロンカオ、アルフレード・モルヴィッロ、エジスト・カニョーニ、アンジェロ・オリヴィエロ・オリヴェッティ、G. アッレーヴィ。

(39) Adolfo Pepe, *Storia della CGdL 1905-1911*, Laterza, Bari, 1972, pp. 11~23, 249~256.

(40) Alfredo Gradilone, *Storia del sindacalismo*, III. 1, Italia, Giuffrè, Milano, 1959, pp. 444~446.

(41) Pepe, *Movimento . . .*, op.cit., pp. 125~127. 河野, 『イタリア自動車産業 . . .』前掲書, 148~151頁。

## IX. 結 語

20世紀初頭のイタリアにおける労働運動の高揚の中で、労働者農民大衆の戦闘的気分の政治的表現として、革命的サンディカリズムは出現した。革命的サンディカリズムがゼネラルストライキの高波を起こしたのではない。そしてこの時期の、労働者農民の間にたかまった戦闘的気分そのものについては、それはあたかも潮汐の変化に似ているとでも言うよりほかになく、気分の発生原因を直接に説明することはできない。けれども、形成期における革命的サンディカリズムの理論、その根拠については、いくらか説明できる。イタリア南部出身



の知識人の多い革命的サンディカリストが考えたことは、おそらく次のようなことであろう。

イタリア南部の勤労大衆、労働者農民の窮状をそのまま放置しておくような社会主義はありえない。イタリアにおける社会主義の存在意義は、南部勤労大衆の社会的経済的政治的状态を目に見えて改善することの内にある。南部勤労大衆の状態のラディカルな改善は社会主義政権の樹立をまって初めて可能となるにしても、この社会主義政権は、全国的な闘い、ことに先進的な、より資本主義的生産力の高度化した段階にある北部イタリアの労働者が、彼らだけの地方的職業的利益に局限されない全国的全人民的な闘いを遂行し、南部の大衆と共に進むことによって、その展望がひらけてくる。もしそうでなければ、南部勤労大衆も南部あるいはもっと小さな地域職域的利益をめざす闘争に視野を限られることになるであろうし、それでは南部の社会状況を根底から揺すぶる大闘争は生じない。革命的サンディカリズムも小さな日常的経済闘争を無視するわけではないが、南部の政治経済全体が北部への従属を強め、南北間の生産力格差＝貧富の差が拡大しつつあるような状況下では、小さな改良闘争だけでは「焼け石に水」なのである。

ところが社会党改良派の指導者達は、議会においてジョリッティと協調しており、このことは結果的に南部の保守的抑圧的な政治支配層を温存することになる。そして労働組合運動の分野でも改良派は、ともすれば職業別組合の労働者だけの排他的利益の擁護にはしりがちであり、極端な場合には南部からの移住者を「スト破り」扱いしかねないし、あるいは、自らの選挙地盤とする地域の労働協同組合の利益のために公共事業を導入することには熱心でも、南部の生産力水準を高め、大量の慢性失業を解消し、南部の零細小作農や農業日雇労働者の契約・労働条件を改善しようとする積極的な意志とプログラムをもっていない。

こうした状況全体を一挙に転換するためには、全国的全人民的な闘争、改良派のヘゲモニーを打破するような強烈なインパクトを与える闘争が必要である。そしてこのような闘争が、ゼネラルストライキ、「すなわち、社会主義がすっかりその中に集約されるところの神話、換言すれば社会主義によって近代社会に対して行われる戦争の種々な発現に照応するあらゆる感情を本能的に喚起し得る形象（イマージュ）の組織化」(ソレル<sup>42)</sup>)である。

それではこのような20世紀初頭のイタリアにおける革命的サンディカリズムの理論について、いかに判断すべきであろうか。

アントニオ・グラムシが1926年秋に記した、サンディカリズムとは「ブルジョアジーとのブロックに反対し、農民とのブロック、まず第一に南部農民とのブロックを支持する労働者の〈改良主義指導者への〉反発の本能的、初歩的、原始的ではあるが健康な表現である」(『南部問題についての若干の主題』)という有名な評言は、おそらく肯綮にあたるであろう。

もとより小生は革命的サンディカリズムの理論の当否を論ずる立場にない。ただ最後に一つの疑問を提出しておきたいと思う。イタリアの革命的サンディカリストは、次のようなソ

レルの観念を是認し、ソレルと共有していたように思われる。「しかし、人々が総罷業の点まで拡大された闘争を想定する時、あらゆる対立は異常に明確な性質を帯びる。……社会は、戦場において、二つの陣営に——そしてただ二つの陣営のみに、截然と分けられる。」<sup>43)</sup>

ゼネラルストライキの晩に、社会がプロレタリアートとブルジョアジーの両陣営に鮮明に区分されるというのは、それがいかに実感であったとしても、その「実感」そのものが幻覚かもしれないと疑ってみなければならぬのではなからうか。ゼネラルストライキという労働運動は現実でも、これに随伴する「ゼネラルストライキの神話」は幻想なのではないだろうか。さらに言えば、階級闘争という概念で示される現実の社会関係は、本質的には、戦場における敵味方の対立として表現されるようなものではないのではなからうか。ここにはまだ、もっとよく考えてみなければならぬ問題があるように思える。

#### 注

(42) ジョルジュ・ソレル、木下半治訳『暴力論』上、岩波文庫、204頁。

(43) 同上書、213頁。

## Lo sciopero generale e la formazione del sindacalismo rivoluzionario in Italia (1903-1906)

Ryusaku YOKOYAMA

- I. Prefazione
- II. Molti eccidi dei operai e contadini dagli sparatorie della forza pubblica si succedono nei primi anni del Novecento. 25 dicembre 1902, Arturo Labriola ed Enrico Leone fondano l'«Avanguardia socialista» a Milano.
- III. 15 febbraio 1904, il Congresso regionale lombardo del Partito Socialista Italiano a Brescia approva l'ordine del giorno del sindacalisti Labriola-Mocchi. 27 marzo 1904, si costituisce a Milano la Lega antiprotezionistica.
- IV. 8-11 aprile 1904, si tiene il VIII Congresso del P.S.I. a Bologna.
- V. Il grande sciopero generale nazionale scoppia nel settembre 1904.
- VI. 6, 13 novembre 1904, l'elezione politiche. Le riflessioni sullo sciopero generale di settembre degl' ideologi delle varie correnti del P.S.I.
- VII. 19 aprile 1905, la Camera dei deputati approva il disegno di legge : Esercizio di Stato delle ferrovie, presentato dal ministero Fortis. Durante l' estate e l' autunno del 1905, P.S.I. lancia una campagna per il suffragio universale. 9 marzo 1906, il gruppo parlamentare socialista vota di fiducia per il ministero Sonnino. Lo sciopero generale di Torino, e 24 deputati socialisti si dimettono dalla Camera per protesta nel maggio 1906.
- VIII. 30 settembre 1906, la Confederazione Generale del Lavoro si costituisce al Congresso di Milano.
- IX. Conclusione. Il sindacalismo rivoluzionario in Italia nei primi anni del Novecento è un' espressione del sentimento militante di massa lavoratore italiana. Il concetto dei sindacalisti rivoluzionari nel processo di formazione mira a unire i contadini meridionali e i lavoratori settentrionali. Il autore, Yokoyama dà la questione per la illusione come «il mito dello sciopero generale» dei sindacalisti italiani ed il Sorel.